

令和3年度 学校評価

尼崎市立小園小学校

1 学校教育目標

「認め合い 支え合い 高めあい」～子どもの主体的な取組を重んじ、子どもが生き生きと活動する学校～

2 重点取組事項

- ・児童一人一人の教育的ニーズに応じた教育活動を推進するとともに、主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくりを追究する。
- ・児童の主体性を伸ばすことを重視しつつ、学びと育ちを最大限支えることで、達成感や自尊感情、自己有用感を高める。
- ・業務改善を確実にを行い、勤務時間の適正化を図ると同時に、児童に向き合う時間を確保し、心の通い合う教育活動を実現する。

3 学校教育に関する重点取組に対する自己評価

(基準 4:十分達成できた 3:達成できた 2:取り組んでいるが、成果は出ていない 1:取組が不十分である)

1 教育・学習内容を充実させ、確かな学力の育成と健やかな体づくりに取り組む		評価
(1) 授業改善の取組を促進するとともに、客観的なデータを踏まえた確かな学力の保証及び縦のつながりを重視した校種間の連携に努める (2) 障害の有無やその他の個々の違いを認識しつつ、様々な人々が生き生きと活躍できる共生社会の形成の基礎となる特別支援教育の取組を充実させる (3) 食育を通して生活改善の取組を促進し、健全な心と身体を培い、豊かな人間性の育成を図る (4) 体育・スポーツ活動の取組を促進し、体力・運動能力の向上を図る (5) 積極的に ICT を活用し、情報活用能力の育成を図る		3.0
取組	成果	課題と改善策
・全教員が「尼崎版 授業改善の視点」に即した授業改善に取り組んだ。 ・あまっこステップアップ調査の学年毎、学級毎の結果を、分かりやすく教員に提示した。 ・昨年度に引き続き、和歌山大学の米澤教授による特別支援教育研修(Web)を行った。 ・栄養担当教員が食育授業を行った。 ・ICT 推進担当教員を中心に、授業で使えるタブレット活用術等を研修した。また、どのクラスでもリモート授業を行った。	・全学年において、主体的、対話的で深い学びを実現する授業展開ができた。 ・あまっこステップアップ調査の結果は、各教員が自らの指導力を省みるひとつの目安であり、授業改善の意識向上に役立てることができた。 ・米澤教授による研修で、愛着障害についての理解をさらに深めることができた。 ・栄養担当教員が授業や給食時の放送をすることで、児童の食への理解を深めることができた。 ・教員も児童も抵抗なく ICT を活用し、スムーズに使いこなせるようになった。	・コロナの影響で、ここ2年は中学校との合同研修や幼稚園児への授業等が行えておらず、校種間連携は進まなかった。今後はリモートの活用等、方法を見直す必要がある。 ・通常学級に在籍する要支援児が増加しており、担任ひとりでは手が回らないクラスもある。適切な支援の方法についての理解をさらに深め、特性に応じた最善の指導を全職員が身に付けなければならない。 ・体育については、今年度もコロナの影響(マスク着用・距離をとること等)で、非常に難しい1年であった。今後も制限の範囲で実践可能な内容を工夫していくしかない。

2 心の教育を充実させ、自己実現の意識の高揚を図る		評価
(1) 基本的な生活習慣確立の取組を促進し、心身共に健全な育成を図る (2) 道徳性育成の取組を促進し、多様性を受容し、思いやりに満ちた人間関係及び社会とのかかわりづくりに努める (3) 各校のいじめ防止基本方針に基づき、誰もが安全・安心して過ごすことができる学校の環境づくりに努める (4) キャリア教育の取組を促進し、社会的自立に必要な能力を育成を図る (5) 不登校にならないようにするための学校づくりを進めるとともに、不登校児童生徒の学習環境の確保や家庭への支援に努める		3.0
取組	成果	課題と改善策
<ul style="list-style-type: none"> ・道徳の授業を要とし、全教育活動で道徳性の育成に取り組んだ。また、今年度初めて児童の縦割り活動を導入した。 ・日々の児童観察と毎学期のいじめアンケートで、いじめの早期発見、早期対応に努めた。 ・今年度も6年生を対象に、園田地域課のお世話で「社会教育地域力創生事業・生き方探究キャリア教育」を実施した。 ・不登校児童については、担任と児生支担当教員が協力して家庭訪問や電話連絡を行った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・全校生を72グループに分けた縦割り活動は、高学年の自己有用感を高め、学年を越えた人間関係づくりに成果があった。互いを思いやる気持ちも育てることができた。 ・いじめ認知について全教職員が共通理解し、迅速で丁寧な対応をすることができた。 ・「社会教育地域力創生事業・生き方探究キャリア教育」では、児童が様々な職種の方から話を聞いたり質問したりすることで、将来の夢や進路、働くことについて考えることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的な生活習慣のうち、時間を守る、忘れ物をしない、といったことは、家庭と協力しながら根気強く指導することが不可欠であるが、思うように改善されないケースもある。まずは、学校における生活習慣の確立をしっかりとっていくことから始めなければならない。 ・いじめの認知基準の厳格化とその後の対応を徹底して行っている結果、アンケート実施に係る担任の負担が非常に大きい。このアンケートに関するフローチャートは市教委で決められているものであり、遵守しなければならない以上、日常の些細なトラブルを減らしていくための指導や働きかけを丁寧に行う必要がある。

3 家庭・地域・学校の連携を深め、活力に満ちた学校園づくりに取り組む		評価
(1) 教職員の資質向上の取組を促進し、業務改善を進めながら学校の組織力及び教育水準の向上を図る (2) 学校と地域との連携・協働を促進し、地域とともにある学校園づくりを推進する		2.5
取組	成果	課題と改善策
<ul style="list-style-type: none"> ・若い教員が多いため、指導力向上のための研修やOJTによる資質向上を進めている。 ・学年打ち合わせを丁寧に行い、授業や生徒指導についてクラス間に差がないようにしている。 ・この2年、コロナの影響で多くの行事をひとつひとつ見直すことになった。 ・職員会議の時間短縮と、職員会議、運営委員会、生徒指導部会、特別支援教育部会の完全ペーパーレス化を行った。 ・地域学校協働活動推進員を通じ、1年生の下校サポートと学期始めの地区別集団下校の付き添いを地域の方々をお願いした。 	<ul style="list-style-type: none"> ・研修やOJT、日々の丁寧な打ち合わせにより、経験の浅い教員が不安なく指導に臨むことが出来た。また、先輩教員に何でも相談できる雰囲気になった。 ・行事の見直しにより、各行事の目的や必要性を改めて考える機会となった。中にはアフターコロナに生かせる変更内容や新しく取り組んだもの、なくしたのものもあり、職員の業務改善にもつながった。 ・下校サポートにはたくさんの地域の方に参加していただき、児童の様子や通学路を見ていただくことができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・若手が多くベテランは少ないという年齢構成ではあるが、視点を変えれば吸収力のある教員が多いと言える。今後も教務主任や研究主任を中心に、意義のある研修を実施し、指導力の向上を図っていく。またOJTを積極的に行い、全体としての組織力向上を図っていく。 ・業務改善に努めてはいるが、コロナ対応のため新たに加わった業務も多く、総量としては増えているのが現実である。次年度はさらに業務改善を進め、職員の心身の健康保持に努めなければならない。 ・地域の教育力の活用については今年度もあまりできなかったが、来年度は何からでもいいため積極的に取り組み、教職員の意識(遠慮)を変えていきたい。

4 安全な教育環境を確保し、防災意識の高揚を図る		評価
(1) 安全教育の取組を促進し、登下校及び学校園内の安全確保を図る (2) 防災教育の取組を促進し、危機管理能力の向上を図る		3.0
取組	成果	課題と改善策
<ul style="list-style-type: none"> ・校内の危険箇所をいち早く発見するため、毎月の安全点検を確実に行った。 ・年度初めに、各担任が学級の児童の家の場所を確認しに回るとき、同時に通学路の安全確認を行った。 ・防災教育については、避難訓練や震災追悼式での講話、資料やDVDの活用等で児童の防災意識を高めた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・安全点検で不備が見つかった箇所は早急に補修し、事故を未然に防ぐことができた。 ・通学路の危険箇所について、学校からの報告や地域からの働きかけを続け、何か所かは対応措置がなされた。 ・防災訓練では、児童は常に真剣に取り組み、訓練の意義や命を守る行動の大切さを学んだ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・安全点検では毎月のように補修が必要な箇所があがってくるが、校舎の老朽化のため修理が追いつかない上、経費の捻出が難しいものも多い。事務職員と相談し、優先順位をつけながら可能な策を講じている。 ・コロナ前は学期始めの数日間、登校時の巡回を行っていたが、この2年間は担任は教室での健康チェックのため、専科教員とSSS、校長にみが校門指導をしている。通学路では、毎朝地域の安全ボランティアとPTAに見守りをいただいている。 ・予定していた不審者対応訓練は、コロナの影響で今年度もできなかった。来年度は是非実施したい。

教育目標		評価
(1) 教育目標の達成に向けた充実した教育活動の展開 (2) 教育目標の具現化と指導の充実		3.0
取組	成果	課題と改善策
<ul style="list-style-type: none"> ・教育目標である「認め合い、支え合い、高め合い—子どもの主体的な取組を重んじ、子どもが生き生きと活動する学校」の達成に向け、各学年、各学級、各分掌で取り組んだ。 ・教育目標をもとに、学年目標や各課題教育の全体計画等が作成された。また、子どもたちにも伝わるよう、「小園の子」(目指す児童像)を教室に表示している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各学年、各分掌が目標具現化のための具体的な方策を策定し、教育活動の一貫性を図った。特に、校内研究においては、教育目標を深く掘り下げ、強く意識したテーマを設定した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちが物理的に交流するような活動が制限された中で、教師は知恵を出しながら最大限できることを行った。学校目標、学年目標、クラス目標を各教室に掲示し、常に意識はさせたが、この2年間は教育活動において十分に達成できたとは言い難い。来年度はさらに工夫しながら、対話によって互いに認め合い、高め合える集団づくりを実現したい。 ・教師は日々学習指導、生活指導を行っているが、その目的が何なのかを意識することが大切である。他と協働しながら主体的に生きることができる児童の育成という教育目標を明確にすることで、毎日の授業や指導にやりがいを感じ、充実した教育活動が実現できると考える。

研究テーマ		評価
(1) 研究テーマの達成に向けた充実した教育活動の展開 (2) 研究テーマの具現化と指導の充実		3.5
取組	成果	課題と改善策
<ul style="list-style-type: none"> 研究テーマ「課題に進んで取り組み、道筋を立てて考える子」を育成するため、全クラスで授業研究に取り組んだ。 サブテーマを「主体的・対話的で深い学びを実現する授業」に変更し、指導要領の基本理念と市教委が奨励する「尼崎版 授業改善の視点」に沿った取組を進めた。 昨年度はコロナの関係で、人数を絞った授業研究しかできなかったが、今年度は、感染対策をしっかりと、通常通り全体での授業研究を行った。 	<ul style="list-style-type: none"> 全教員がテーマに沿った授業づくりを続けた結果、あまっコストップアップ調査の成績が、一昨年より昨年、昨年より今年、と着実に上がっている。特にD層の割合がどの学年でも減少している。研究と学力向上の両輪がうまく作用した結果である。 研究会の講師を今年度から変えたことで、毎日の授業に取り入れやすい指導法を学ぶことができた。 全体での授業研究は、若い教員にとっては、勉強の場であり、ベテランにとっては刺激を受ける場となった。 	<ul style="list-style-type: none"> 教師によって指導力に差が出ないよう、学年毎に、より一層授業の打ち合わせをしっかりと行う必要がある。 来年度に向け、より現実に即したテーマを作成した。さらに指導法を研究し、テーマに沿った授業づくりを全員で推進していきたい。